

北海道大会に参加するチームの遵守すべき事項 (2026年度版)

(各支部へ：本文は必ず全道大会代表チームに渡し、周知を図って下さい。)

一般社団法人 北海道軟式野球連盟



北海道大会に参加するチームの遵守すべき事項全編 ⇒

I. 監督会議（学童・少年は監督・主将会議）について（開催の場合）

- 1 北海道大会に出場する代表チームは、監督会議が開催される場合、監督及び主将が必ず出席すること。ただし、一般チームにおいては、監督又は主将のどちらかが都合により出席出来ない場合は代理が認められる。（この場合、監督及び主将両方の代理は認められない）少年部及び学童部並びに女子のチームについては、監督が都合により出席できない場合は、事前に登録しているコーチが代理で出席することが出来る。また、主将が特別な事由で出席できない場合はこの限りではない。

なお、監督会議に出席しないチームは、原則として棄権とみなします。

（全国大会では、一般チームは監督または主将のどちらかの1名の出席でよい。）

監督会議への出席者は、試合で使用するユニフォームを必ず着用すること。なお、監督会議で説明又は決められた事項は、必ずチーム全員への周知を徹底すること。

II. 開会式について（開催の場合）

- 1 チームは、選手集合場所で支部代表旗をセットし、入場の際には、プラカードを先頭に、支部代表旗を持った主将（前年度優勝支部は、優勝旗を先に）に続き、背の低い順に1列若しくは2列で行進すること。（少年・学童・女子も同様）（具体的には開催地の指示に従うこと。ちなみに全国大会では2列になる。）
- 2 開会式には、全員ユニフォーム並びにスパイクで入場行進をすること。ただし、球場の芝保護の為にアップシューズ使用も認める。また、ウインドブレーカー等の着用は禁止する。なお、高田宮賜杯学童（マクドナルドトーナメント）大会におけるドナルド・マクドナルド・ハウス財団支援に係る「スマイルソックス」の着用チームの入場行進は認める。
- 3 開会式には、登録選手全員の参加が望ましいが、最低でも10名以上参加すること。ただし、1回戦不戦勝のチームは2人以上でも可。ただし、前年度優勝支部はプラカードの保持、優勝旗返還などを考慮して3名以上でなければならない。（全国大会では不戦勝のチームでも10名以上）
- 4 開会式は、大会の意義あるセレモニーであり、手を大きく振って「照れず」に元気よく行進すること。（事前にチームで行進の練習を行うことが望ましい。）
- 5 上記のほか、体育館等の「室内」で開催される場合は、開催地支部の指示に従うこと。

- ※ 一部（学童・少年大会等）を除き、原則「監督会議及び開会式」は開催されないが、開催する場合や他の方法（開始式や始球式など）においては、開催支部の指示に従うこと。

Ⅲ. マナーと応援方法について *競技者必携 P11～P12 抜粋参照

野球にヤジは必要ありません。大人から子どもまで、ヤジの無いクリーンな軟式野球界を目指しましょう。

マナーを守った節度ある応援については、チーム代表者の責任において応援者との共有をお願いします。

※ なお、鳴り物の使用を制限している球場では使用できません。

マナーを守った節度ある応援について

マナーを守った節度ある応援については、チーム代表者の責任において統制をお願いする。対戦相手チームの投手や選手にプレッシャーをかけるような応援は慎む。

また、懸命なプレイや素晴らしいプレイには、自チーム、相手チーム に関係なく、大きな称賛を送る。

- ① 試合前のシートロック時やスターティングメンバーのアナウンス時には、太鼓の使用や声援を控える(拍手は可)。
- ② イニング間は一切の応援をやめ、守備側は座ったまま、個別の声援や拍手で応援する。試合が中断(球審の場内放送や選手のケガなど)した場合、応援や演奏は直ちに中止する。
- ③ 試合途中のグラウンド整備中は、応援や演奏を中止して水分 補給や休息に充てる。

※ なお、鳴り物の使用を制限している球場では使用できない。

Ⅳ. 交通安全について

移動手段として自家用車等を利用する場合は、交通安全に心掛け、時間的な余裕をもって行動すること。

Ⅴ. 傷害保険への加入について

国スポでは、大会実施要項により「傷害保険」への加入が義務付けられているが、他の全道大会においても、選手の怪我など、不測の事態に適切に対応できるよう、チームの責任において「損害保険」に加入するように努めること。(この保険は、チームの1年間の活動における事故・損害などの補償はもとより、他の損害を補償する「賠償責任保険」など内容も充実している。)

なお、支部大会に関しては、所属支部に委ねることにします。

〔競技運営に関する取り決め事項〕(試合のスピード化含む)

- 1 各球場は、第1試合の試合開始予定時刻の90分前に開門する。
- 2 ベンチは、組合せ番号の若い方を一塁側とする。但し、1チームが続けて2試合行う場合はベンチの入れ替えをしない。
- 3 チームは試合開始予定時刻の60分前までに必ず球場に到着し、試合に臨む準備を整えること。ただし、当日の試合の進み具合によっては試合開始が早まる場合もあるので、必ず試合の進行状況を確認すること。(会場到着を報告し、打順表を受け取ること)
- 4 その日の第1試合に出場のチームは、外野に限り練習に使用してもよい。その際、アップ用の服装でもよいが、打順表提出時には、全員ユニフォームに着替えること。
トレーニング・アップ用補助具は、打順表提出まで使用することができる。
- 5 第1試合のチームは、開会式前に用具・装具をダッグアウトに入れ、試合開始予定時刻の30分前に、大会本部が用意した打順表【当日の試合に出場する者のみを記入すること。※ただし、

全道大会における特別な運用で、全国大会では全員記入が基本となっているので注意すること。また、選手が当日遅れて到着しても未記入の場合は出場できないので注意すること。打順表は1セット6枚複写のため、強めに記入する。】を主将(学童・女子・少年は監督と主将)が大会本部に提出し、球審立会いのもとに攻守を決定する。

- 6 第2試合以降は、9回戦では前の試合の5回終了時に、7回戦では4回終了時に、6回戦では3回終了時に打順表を提出し、攻守を決定する。(それぞれの回に入ったら提出など、速やかな対応を心がけて下さい。)前の試合の終了前にグラウンド入口に待機して、試合終了の挨拶中にグラウンドへ入り、用具・装具をダッグアウトの外野側に置き、試合開始予定時刻に関係なく、シートノックに入り、前の試合が終了した後20分を目安に次の試合を開始する。

【打順表の記載注意】少年大会や学童大会において、4年生以下の選手がいる場合は、打順表の背番号に判るように印(4年生以下△)を付けて下さい。

- 7 大会期間中に監督または主将が欠場する場合、代理監督(主将)を指名しなければならない。この場合、打順表交換時に大会本部に申告する。
- 8 攻守決定後、速やかに後攻チームからシートノックに入る。(時間は5分間)なお、シートノックの有無に関わらず試合開始に支障のない範囲で、ベンチ前での内野手のサイドノック、外野手のサブノックを安全に配慮して行うことができる。(2026年度修正)

シートノック

- (1) ダートサークル内に留まる、あるいは出入りする補助員は、ヘルメットを着用すること。
- (2) 後攻チームより行い、時間は5分間とする。
- (3) ノッカーも必ず選手と同様のユニフォームを着用し、捕手はプロテクター、レガーズ、捕手用ヘルメット、ファウルカップを必ず着用すること。
- (4) 大会運営上、シートノックを行わずに試合を開始することもある。この場合は、攻守決定時に通知する。

※ ノッカーにボールを手渡す選手、または野手からの送球をノッカー付近で捕球する選手及び外野手からの送球を補助する選手(中継者)はヘルメットを着用すること。

少年・学童・女子では、登録されているコーチ(背番号28・29)がノックの補助員として携えることを認める。補助員に入るコーチもヘルメットを着用すること。また、試合開始までの間はコーチ1人のブルペン捕手を認める。(フェイスマスク着用)

なお、別のコーチ等が外野手にノックすることはかまわない。

サイドノック・サブノック

試合開始前の時間が許す範囲において、シートノックの有無にかかわらず、以下の条件でサイドノック及び外野サブノックの実施を認める。

- (1) サイドノック：ベンチ前のスペースを使用し、塁間程度の距離で内野手のゴロ捕球練習を行うこと。
- (2) サブノック：一塁または三塁後方のファウルテリトリー(アンツーカー:土の部分)から、安全な方向に向け外野手へノックを行うこと。

※ ノッカーにボールを手渡す選手、または野手からの送球をノッカー付近で捕球する選手及び外野手からの送球を補助する選手(中継者)はヘルメットを着用すること。

※ 学童部（女子含む）の場合、健康を留意し、全国大会及び北海道大会では6回戦若しくは1時間30分の時間制限が設けられています。

なお、試合中プレーヤー等の負傷手当のための遅延は試合時間に算入しません。

- 9 少年・学童・女子では、登録されているコーチ（背番号28・29）がノックの補助員として携わることを認める。補助員に入るコーチもヘルメットを着用すること。また、試合開始までの間はコーチ1人のブルペン捕手を認める。（フェイスマスク着用）
なお、別のコーチ等が外野手にノックすることはかまわない。
- 10 次の試合に向けたグラウンド整備は、シートノック終了後に行う。
- 11 次の試合の先発バッテリーは、攻守決定後、球場内のブルペンを使用することができる。ただし、当該試合に支障のない状況での使用に限る（試合中のベンチ内監督に確認する）。捕手は試合と同様の用具等を着用すること。
- 12 試合に出場する捕手は、プロテクター・レガース・フェイスマスク（スロートガード付）・捕手用ヘルメットのほか、ファウルカップを着用すること。また、投球練習時においても同様とする。
ただし、捕手に求められる用具を全て着用できない場合は立っての捕球とする。
なお、捕手・審判員用マスクは「J S B B」マークのほかに「S G」マークのついた連盟公認のものを使用しなければならない。
- 13 ベースコーチは、必ずヘルメットを着用すること。また、ベースコーチのウインドブレーカーの着用については雨天又は寒冷時に限り認める。
- 14 サングラスは、投手も含めた全てのプレーヤーが大会本部の承認なしに使用できる。但し、投手のミラーレンズサングラスは使用できない。なお、少年及び学童並びに女子の監督・コーチも同様に認める。
- 15 球場内での打撃練習は外野芝生部分で公認球によるトスバッティングのみ認め、フリー及びハーフバッティングを禁止する。
- 16 ベンチ内での電子機器類（携帯電話、パソコン等）及び携帯マイクの使用並びにカメラ等による撮影行為を禁ずるが、電子スコア記録用として1台の使用は認めます。また、指示用のメガホンはベンチ内に限り1個の使用を認めます。
- 17 攻守交替時に、最後のボール保持者は、投手板にボールを置いてベンチに戻ることに。
雨天時は相手投手又は野手、ベースコーチに渡すこと。
- 18 雨天の場合でも試合を行うことがある。また、午前中見合わせて午後から行う場合もあるので、大会本部からの連絡に注意すること。なお、当日試合不可能な場合は大会本部から連絡する。
- 19 ベンチに入れる人員は、「一般」は、登録されユニフォームを着用した監督30番を含む選手25名以内（但し、国スポ及びマスターズは別に定める）とチーム代表者、マネージャー、スコアラー、トレーナー等（有資格者）各1名とする。
「少年部・学童部・女子」は、登録されユニフォームを着用した監督30番、コーチ29番・28番及び選手25名以内とチーム代表者、マネージャー、スコアラー、トレーナー（有資格者）各1名とし、この内1名は公認学童コーチ等の有資格者であること。なお、監督、コーチは18歳以上でなければならない。また、熱中症対策として保護者2名以内をベンチに入れることができる。
【この適用については、大会本部が判断し、所定のビブス着用をお願いする】また、「全日本シニ

ア」は、登録されユニフォームを着用した監督 30 番を含む選手 25 名以内とチーム代表者、マネージャー、スコアラー、トレーナー（有資格者）各 1 名とする。ただし、監督、マネージャー、スコアラーが選手を兼ねる場合には、選手登録 25 名以内とする。

20 試合中にベンチに入ることが許されたメンバーであれば、ベンチ内においては誰がサインを出してもよい。

21 夏季の学童大会等では、炎天下の中、守備時間が長い場合（概ね 20 分）に健康維持を考慮し、審判員の判断で給水タイムを設けることができる。（この場合において試合時間には含めない。）また、試合中プレーヤー等の負傷手当のための遅延は試合時間に算入しません。
なお、各チームにおいては熱中症対策ガイドライン等を参照してください。

22 試合中の禁止事項【必携 P57～59】 抜粋参照

- ① 競技前、中、後を問わず、相手側プレーヤーや審判員に手をかけたり、暴言を吐いたり、侮辱する言動を厳禁する。万一このような事態が生じたときには、退場を命ずる。なお、各支部の行うすべての大会を含めて、試合に関連して現実には暴力行為を行った者に対して、以後の出場を停止するとともに、所属チームにも何らかのペナルティを科すこととする。このペナルティを最低として処理する。
- ② 選手や審判員に対する全ての野次を禁止する。また、スタンドからの応援団のヤジおよび目に余る行為はチームの責任とする。
- ③ 競技場内（ベンチを含む）では、喫煙およびガム等を噛むことを禁止する。また、喫煙可能な場所であっても、ユニフォームを着用しての喫煙は禁止とする。
- ④ マスコットバットを次打者席に持ち込むことはよいが、プレイに支障をきたさないよう注意し、適切な処置をすること。なお、競技場での素振り用パイプ及びリングの使用を禁止する。
- ⑤ 投手が手首や腕にリストバンド、サポーターなどの使用を禁止する。なお、負傷等の応急処置として、テーピングなどの使用を認めることがある。この場合、担当審判員の許可を得ることとする。但し、投球に影響を与えるものを直接ボールに触れる箇所には使用できない。投手が、負傷で包帯等を巻く必要がある場合は球審に申し出し、承認を得ること。
- ⑥ プレーヤーが塁上に腰を下ろすことは禁止する。
- ⑦ 捕手の後方で投球を見たり、素振りや待機することを禁止する。待機場所は次打者席。
- ⑧ 試合が開始されたら、控え選手はむやみにベンチから出てはならない。投手の準備投球にあわせて素振りをすることを禁止する。（5.10k）なお、次のことについては認める。
 - (1) 攻守交代時にファウルグラウンドで外野方向へのランニングをすること。
 - (2) 攻守交代時に自チームの練習をベンチ前で見守ること。ただし、球審の「プレイ」宣告までにはベンチに戻ることを。（3）攻守交代時に外野手とキャッチボールをすること。
- ⑨ 次打者席では、投手が準備投球及び投球姿勢に入ったら素振りをしてはならない。投手も必ず次打者席に入ること。（5.10k【注1】）

23 試合のスピード化に関する事項【必携 P59～62】 抜粋参照

技術委員会

テンポの良いゲームを展開しましょう。

1) チーム

- ① 攻守交代は、駆け足でスピーディに行うこと。（ベースコーチも実行する）
- ② 日程・時間に余裕がある場合でもスピーディな試合進行を意識すること。
- ③ ベンチ前の整列は、出過ぎないこと。プレイのコールを待たせないこと。
- ④ 投手が投手板に触れて投球位置についたら、大きな声を発することなくプレイを見守ること。

2) 投手

- ① 遅延行為とみなされる投手の牽制球はやめさせること。
- ② 投手は、ロジンバッグを指先だけで使用し、丁寧に扱うこと。
- ③ 捕手から返球を受けた投手は、速やかに投手板に着き投球動作に入ること。

3) 捕手

- ① 捕手は、返球したり声をかけるためにホームプレートの前や横に出過ぎないこと。
- ② サインについて、複雑なものは無くし、速やかに出すよう指導すること。
- ③ 捕手の行動を機敏にさせること。
- ④ 速やかなサイン・用具の脱着・バックアップや打合せの後、速やかに守備位置に戻る。

4) 打者

- ① 攻撃側の第一打者・次打者を所定の位置に速やかに着くよう喚起すること。
- ② 打者はみだりに打者席を外さないこと。(サインは必ず打者席内で見る)アマチュア野球内規②バッターズボックスルール(P88 参照)を理解し、これを実行すること。
- ③ 次打者席では、投手が投球に関連する動作(サインを見る姿勢)に入ったら速やかにスイングをやめ投球を注視すること。
- ④ 四球の走者が保護具(レッグガード・エルボーガード)を外すときには、本塁周辺で外し一塁へ向かうこと(ヒットバイピッチの時も同様とする。)

5) 野手

- ① 内野手のボール回しは定位置で1回とする。
- ② 内野手が投手に返球するときは、定位置で返球すること。マウンドまで持って行かせない。このような行動は即注意し徹底させること。
- ③ 内野手がアドバイスなどでマウンドへ近づかないよう注意すること。(タイムの回数制限に注意)
- ④ タイムをかけ意図的にスパイクの紐の結び直しをすることは認めない。

1 守備側のタイムの回数制限【必携 P59~62】 抜粋参照

- (1) 監督またはコーチ等が1試合に投手のもとへ行ける回数は3回以内とする。この際、投手(内野手含む)にペットボトル等タオルを持参することができる。ただし、選手を帯同することはできない。なお、1イニングに同一投手のもとへ2度行けば、その投手は自動的に試合から退かなければならないは適用しない。
また、延長戦(タイブレーク方式を含む)は、1イニングに1回行くことができる。ただし、投手交代の場合は回数に含まない。
- (2) 捕手または内野手が、1試合に投手のもとへ行ける回数は、3回以内とする。
なお、延長戦(タイブレーク方式を含む)は、1イニングに1回行くことができる。野手(捕手も含む)が投手のもとへ行った場合、そこへ監督またはコーチ等が行けば、双方1回として数える。逆の場合も同様とするが、投手交代の場合は、監督またはコーチ等の回数には含まない。
- (3) 投手交代の場合、投手と捕手が打ち合わせ(サインの確認)のために、準備投球の前あるいは後に少しだけ会話することは、捕手または内野手の回数に含まない。
- (4) 監督がプレーヤーとして出場している場合は、投手のもとへ行けば野手としての1度と数えるが、協議があまり長引けば、監督が投手のもとへ1度行ったこととし通告する。
- (5) 攻撃側のタイム中に守備側は指示を与えることができるが、攻撃側のタイムより長引けば守備側の1回とカウントされる。

2 攻撃側のタイムの回数制限

- (1) 攻撃側のタイムは、1試合に3回以内とする。なお、延長戦(タイブレーク方式を含む)は、1イニングに1回とする。
- (2) 守備側のタイム中に攻撃側は指示を与えることができるが、守備側のタイムより長引けば攻撃側の1回とカウントされる。

3 タイムは1分以内を限度とする。

4 打者が二塁打を打ち、打者用手袋から走塁用手袋に変える為にタイムをかける行為を禁止する。ただし、レッグガードとエルボーガードを外す時のタイムは認めるが速やかに行うこと。

5 タイムについて

- (1) 監督はタイムを要求するとき以外は、みだりにベンチを出てはならない。
- (2) タイムは、プレーヤーの要求したときでなく、審判員が宣告したときである。打者は、

投手がwindアップを始めるか、セットポジションをとったならば、①打者は打撃姿勢をやめることは許されない。

6 本塁打の走者を迎える場合は、ベンチの前のみとする。

24 バッターボックスルールを適用する。(5.04 (4)) (必携 P88 アマチュア内規②)

(1) バッターボックスルール 抜粋

打者は打撃姿勢をとった後は、次の場合を除き、少なくとも一方の足をバッターボックス内に置いていなければならない。この場合は、打者はバッターボックスを離れてもよいが、ホームプレート周囲の土の部分を出てはならない。

- 1) 打者が投球に対してバットを振った場合。
- 2) チェックスイングが塁審にリクエストされた場合。
- 3) 打者が投球を避けてバランスを崩すか、バッターボックスの外に出ざるを得なかった場合。
- 4) いずれかのチームのメンバーが「タイム」を要求し認められた場合。
- 5) 守備側のプレーヤーがいずれかの塁で走者に対するプレイを企てた場合。
- 6) 打者がバントをするふりをした場合。
- 7) 暴投または捕逸が発生した場合。
- 8) 投手がボールを受け取った後マウンドの土の部分から離れた場合。
- 9) 捕手が守備のためのシグナルを送るためキャッチャースボックスを離れた場合。

(2) 打者は、次の目的で「タイム」が宣告されたときは、バッターボックスおよび「ホームプレート周囲の土の部分」を離れることができる。

- 1) 負傷または負傷の可能性がある場合。
- 2) プレーヤーの交代
- 3) いずれのチームの協議

ペナルティ (1)・(2)

打者が意図的にバッターボックスを離れてプレイを遅らせ、かつ(1)の1)～9)の例外規定に該当しない場合、または、打者が意図的に「ホームプレート周囲の土の部分」を離れてプレイを遅らせ、かつ(2)の1)～3)の例外規定に該当しない場合、球審は、その試合で2度目までの違反に対しては警告を与え、3度目からは投手の投球を待たずにストライクを宣告する。この場合はボールデッドである。

もし打者がバッターボックスまたは「ホームプレート周囲の土の部分」の外にとどまり、さらにプレイを遅延させた場合、球審は投手の投球を待たず、再びストライクを宣告する。

25 競技者のマナーに関する事項【必携 P63】

- 1 捕手が投球を受けたときに意図的にボールをストライクに見せようとミットを動かす行為
- 2 捕手が自分で「ボール・ストライク」を判定するかのように、球審がコールする前にすぐミットを動かして返球態勢に入る行為
- 3 球審のボール、の宣告にあたかも抗議するかのように、しばらくミットをその場に置いておく行為
- 4 打者がヒジ当てを利用してのヒット・バイ・ピッチ(死球)狙いの行為
- 5 打者がインコースの投球を避ける動きをしながらあたりにいく行為
- 6 野手が走者の視界を遮る行為(規則 6.01h (2))
 - (1) 走者がタッグアップしているとき、野手が走者の前に立ち視界を遮る行為
 - (2) 野手が走者の前に立ち、ボールを保持している投手板上の投手への視界を遮る行為
- 7 その回の先頭打者は、準備投球を近くで見る行為(次打者席で待機)
- 8 投手が投手板に触れて投球位置についたら大きな声を発することなくプレイを見守ること。
- 9 学童部・少年部の試合においては、ベンチ内の大人がいかなる状況であっても、選手を委縮させるような言動

26 用具・装具に関する事項【必携 P64～P66】

- 1 試合に出場する捕手は、安全のためプロテクター、レガーズ、マスク(スロートガード付)、捕手用ヘルメット、ファウルカップを着用すること。
なお、攻守交代などに伴い捕手が用具着用中に、控えの選手等が準備投球を捕球する際は、捕手に求められる用具をすべて着用していない限り、立って捕球すること(出場中の内野手可)。打者、次打者、走者およびベースコーチは、必ずヘルメットを着用のこと(ベースコーチを除

き、いずれも公認された両側か片側にイヤフラップの付いたもの)。なお、捕手用ヘルメットとマスクの一体製品は使用を禁止する。

- 2 サングラスは、大会本部の承認なしに使用できる。ただし、投手はミラーレンズサングラスの使用はできない。また、野手がサングラスを帽子の底の上に乗せることを認める。
- 3 ネックウォーマーは、季節を考慮し着用することができる。
- 4 監督は、アピールや選手交代などをするときには、その身分を明らかにするために、グラウンドコートを開いて申し出ること。(背番号の確認)
- 5 アイブラック(アイパッチ)の使用を認める。
- 6 グラブについて
〔投手用〕①グラブ本体(捕球面・背面・ウェブ)は2色まで可。
ただし、白/灰色/PANTONE®の色基準14番より薄い色の使用は禁止する。
②氏名・背番号・チーム名などの刺繍糸の色、大きさ共に制限なし。
③ハミダシ・紐・指かけ、柄模様についても制限なし。
〔野手用〕連盟では、「守備位置に関係なく野手のグラブの色の制限は適用しない。
- 7 バットは改造、加工したものは使用できない。ただし、後付けのフレアグリップの使用については、専用テープ等で完全に固定・被覆されたならかな形状のものであれば使用は認める。
- 8 学童部バットの使用制限
安全面を考慮し、学童部では、一般用バットのうち、打球部にウレタン、スポンジ等の素材の弾性体を取り付けたバットの使用を2025年より禁止する。なお、一般用バットであっても、上記以外の木製・金属製・カーボン製・複合(金属/カーボン)バットについては、使用制限は行わない。(注)少年用バットの使用制限は行わない。
- 9 メディシンボール等、アップ、トレーニングのための補助具は打順表の提出までは使用することができる。

27 その他

- ① ダブルヘッダーは1日2試合まで行うことができる。継続して行う場合は、前の試合終了後、30分以内を目安に開始する。
- ② 試合中に雷が発生した場合は、状況を判断し、試合を中断して全員安全な場所に避難させ、気象台等の状況を掌握し、その後の処置を行う。
- ③ 試合中、プレーヤーの人命にかかわるような事態が発生した場合、人命尊重を第一に、プレイの進行中であっても、審判員の判断でタイムを宣言することができる。この際、その宣告によってボールデッドとならなかつたらプレイにどのようなようになったかを判断して、ボールデッド後の処置をとる。
- ④ 打者が頭部(胸部など)にヒットバイピッチ(死球)を受けた時はその程度を問わず臨時代走の処置を行う。また、塁上の走者が負傷し、一時走者を代えないと中断が長引くと判断したときは臨時代走の措置を行うことができる。(打球、送球の場合も同様)その際、臨時代走は9人の中から打順の前位の者とするが、投手及び投手兼任のDHを除く。
- ⑤ 少年部・学童部(女子も含む)チームの試合後の大会本部への挨拶は不要です。(応援団への挨拶は奨励します。)

〔競技に関する特別規則〕

1 正式試合

- ① 「一般」は、9回戦(マスターズと全日本シニアは7回戦)また「少年部(女子含む)」は7回戦とし、「学童部(女子含む)」は6回戦(4年生以下の大会は5回戦)とする。
- ② 正式試合(降雨・日没コールドゲーム)になる回数は、9回戦の場合7回とし、7回戦の場合は5回とする。
※6回戦の場合において、試合開始以降1時間30分経過後の均等回完了をもってゲームは終了する。この場合のゲームは、5回及び制限時間経過のいずれか先に到達した方で試合を決する。
- ③ 得点差によるコールドゲーム(決勝戦も適用)は、9回戦の場合は、5回以降10点差、7回以降7点差とし、7回戦および「少年部」・「学童部」・「女子」は、5回終了時以降7点差とする。(全国大会では、一般の場合「9回戦」の全て7回以降7点差で、全日本シニアに限り5回以降7点差とする。)

2 延長戦

- ① 一般（天皇杯・国スポ・知事杯は除く）」は、9回を終了して同点の場合は、10回よりタイブレーク方式【無死1・2塁、継続打順】にて勝敗が決するまで行う。また、3時間経過後も同点の場合は、次の回よりタイブレーク方式とする。

天皇杯・国スポ・知事杯は、9回を終了して同点の場合、試合開始後3時間の範囲内で最長12回まで（全国大会の延長は回数に制限なく、試合開始後3時間以内までとなっている）延長を行い、なお同点の場合、または試合開始後3時間を経過し同点の場合は、いずれもタイブレーク方式により勝敗を決する。【無死1・2塁、継続打順】高松宮賜杯大会、東日本大会は、9回を終了して同点の場合は、直ちにタイブレーク方式を行う。（2026年度修正）

- ② マスターズ及び全日本シニアは、7回を終了して同点の場合は、直ちにタイブレーク方式を行う。

- ③ 「少年部（女子含む）」は、7回終了して同点の場合は、直ちにタイブレーク方式を行い、2イニングを完了しても決着がつかないときは抽選で勝敗を決する。ただし、決勝戦の場合においては、投手の投球制限を遵守の上、勝敗が決するまでタイブレーク方式を行う。

また、健康維持を考慮し、試合開始後2時間30分を経過した場合は、新しいイニングに入らず、均等回の得点をもって勝敗を決する。なお、同点の場合は抽選で勝敗を決する。

- ④ 「学童部（女子含む）」は、6回を終了又は試合開始後1時間30分経過後の均等回完了時に同点の場合は直ちにタイブレーク方式を行い、2イニングを完了しても決着がつかないときは抽選で勝敗を決する。

注1) 少年部（女子含む）に関して“試合開始後、「2時間30分及び均等回の得点を持って勝敗を決する」は道連の規定として運用します。

全国大会での2時間30分の制限は5回終了後、2時間30分を経過した場合と解釈。

注2) 「抽選で勝敗を決する場合」は道大会及び地区大会等のみの適用。

3 「少年部・学童部・女子」の投球制限について

投手の投球制限については、肘・肩の障害防止を考慮し、投球数を次の通り制限する。

学童部は1日70球以内（1週間では210球以内）、4年生以下は60球以内（1週間では180球以内）、少年部は100球以内（1週間では350球以内）とする。ただし、試合中規定投球数に達した場合は、その打者の打撃を完了するまで投球できる。（学童部の1週間規定は2026年から）

12秒、20秒ルール適用、タイム後の投球は投球数にカウントする。

4 特別継続試合の再開

- ・もとの中断された回（個所）から再開します。
- ・両チームの出場者と打順表は、試合中断時と全く同一でなければならない。
- ・中断前の試合に提出されたオーダーに記載されていない選手や途中交代し、試合から退いた選手は、再開された試合には出場できない。
- ・中断、再開の際は、試合の終了及び開始と同様に挨拶をする。
- ・グラウンドを変えて再開する時及び翌日特別継続試合として行う時は、原則としてシートノックを行います。
- ・特別継続試合は、全ての事項についてもとの試合を引き継ぐ。（試合時間、投球数、タイムの回数制限、警告回数等）
- ・学童部や少年部における特別継続試合の投球数と試合時間の取り扱いは、元の試合で投じた球数を引き継ぎ、残りの球数と残りの試合時間で行われます。但し、同じ日に更に試合ある場合は、1日の投球制限を超えない範囲で登板できる。

5 全軟連（道軟連）が主催する大会においては、『指名打者ルール』を使用することができる。

また、学童・少年（女子共）には二刀流選手を採用しない。

6 抗議権を有する者は、監督か当該プレーヤーのいずれか1名とする。

- 7 規則 5.10 d 【原注】の「同一イニングでは、投手が一度ある守備位置についたら、再び投手となる以外他の守備位置に移ることはできないし、投手に戻ってから投手以外の守備位置に移ることもできない。」は適用しない。
- 8 監督またはコーチが投手の所へ行く回数の制限
監督またはコーチが、1試合に投手の所へ行ける回数は3回以内とする。なお、延長戦（タイプブレイク方式も含む）は、1イニングに1回行くことができる。ただし、投手交代の場合は回数に含まない。
- 9 守備側のタイムの回数制限（試合のスピード化に関する事項も参照）
- ・捕手または内野手が、1試合に投手の所へ行ける回数を3回以内とする。なお、延長戦（タイプブレイク方式も含む）となった場合は、1イニングに1回行くことができる。野手（捕手も含む）が投手の所へ行った場合、そこに監督またはコーチ等が行けば、双方1回として数える。逆の場合も同様とするが、投手交代の場合は、監督またはコーチのみ回数には含まない。
 - ・監督またはコーチ等がプレーヤーとして出場している場合は、投手のところに行けば野手としての1度と数えるが、協議があまり長引けば、監督またはコーチ等が投手の所へ1度行ったこととし、通告する。
 - ・攻撃側のタイム中に守備側は指示を与えることができるが、攻撃側のタイムより長引けば、守備側の1回とカウントされる。
 - ・投手交代の場合、投手と捕手の打ち合わせ（サインの確認）のために、準備投球の前あるいは後に少しだけ会話することは、捕手または内野手の回数に含まない。
- 10 攻撃側のタイムの回数制限（試合のスピード化に関する事項も参照）
- ・攻撃側のタイムは、1試合に3回以内とする。なお、延長戦（タイプブレイク方式も含む）は、1イニングに1回とする。
 - ・守備側のタイム中に攻撃側は指示を与えることができるが、守備側のタイムより長引けば、攻撃側の1回とカウントされる。
- 11 タイムは1分以内を限度とする。（試合のスピード化に関する事項も参照）
- 12 競技者のマナーに関する事項 【必携 P63】（マナーや用具・装具に関する事項も参照）
マナーアップとフェアプレイの両面から、次のような行為を禁止する。
- ・捕手が投球を受けたとき意図的にボールをストライクに見せようとミットを動かす行為
 - ・捕手が自分で「ボール・ストライク」を判定するかのように、球審がコールする前にすぐミットを動かし返球態勢に入る行為
 - ・球審のボール宣告にあたかも抗議するかのように、しばらくミットをその場に置いておく行為
 - ・打者が投げ終わった球種を次打者他に知らせることを禁止する。
 - ・打者がヒジ当てを利用してのヒット・バイ・ピッチ（死球）狙いの行為
 - ・打者がインコースの投球を避ける動きをしながら当たりにいく行為
 - ・プレイ中みだりにベンチを出る行為
 - ・野手が走者の視界を遮る行為（6.01 h 【2】）
 - * 走者がタッグアップしているとき、野手が走者の前に立ち視界を遮る行為
 - * 野手が走者の前に立ち、ボールを保持している投手板上の投手への視界を遮る行為
 - * 相手選手を威嚇する行為、プレイを利用して相手選手を欺く行為
 - ・投手が投手板に触れて投球位置についたら大きな声を発することなくプレイを見守ること。
 - ・学童部・少年部の試合においては、ベンチ内の大人がいかなる場面であろうとも、選手を委縮させるような言動は厳禁とする。
 - ・審判の代わりに選手またはベースコーチが、判定とコールまたはジェスチャーを行う行為は禁止する。（セルフジャッジの禁止）

- 13 規則適用上の解釈【必携 P67～84】 を参照してください
- 14 試合中、次のイニングに引き続き投げる投手は、ベンチ前のキャッチボールは禁止するが、コーチボックス外野側角からポール方向のファウルテリトリーでの軽いキャッチボールは認める。また、ブルペンでのキャッチボールは2組4名以内を認める。
- 15 全道大会優勝若しくは準優勝し、北海道代表となったチームは、ユニフォームの左袖に「北海道」（ローマ字も可）のマークを入れることになることから、支部代表チームは、予めマークを入れておくこと。
また、本国スポに出場するチームは胸マークを「北海道」（ローマ字も可）としなければならない。
- 16 背番号は、監督 30 番、コーチ 29 番と 28 番、主将を 10 番とし、選手は 0 番から 99 番とする。
- 17 すでに出場している投手がファウルラインを超えて投手板に向かえば、そのときの第 1 打者（または代打者）に対して投球を完了する義務がある。ただし、その投手が負傷または病気のために、投球が不可能になったと球審が認めた場合は除く。
- 18 監督又はコーチがマウンドに行く回数のカウントの仕方は、①監督又はコーチがファウルラインを越えて投手のもと（マウンド）へ行った場合は必ず 1 回に数える（ただし投手交代の場合を除く）、②球審（審判員）は、監督又はコーチに投手のもと（マウンド）へ行った回数を知らせる。【5.100 関連】
- 19 故意四球は守備側の監督の宣言によって成立し、ボールデッドで行う。
- 20 支部代表チームをはじめ、道連登録全チームは、道連及び支部におけるコンプライアンス指針等の主旨を十分理解し、健全で楽しい軟式野球の普及に努めること。
- 21 全道大会申込書については、競技者登録システムを活用したデータ提出とし、この場合、「支部長印」は不要とします。ただし、支部および支部長名は記載して下さい。
なお、大会参加料は事前に道連指定口座に送金して下さい。詳しくは、各大会要項等を参照下さい。
- 22 全ての一般大会では、登録者の身分を証明する写しの提出（野球ねっとへ登録）が義務付けられているので注意すること。（登録者順に列記して下さい。身分証明は支部予選から登録することが望ましい。）
- 23 国スポのチーム編成要件は、他の一般大会同様に道内に居住又は勤務する者で編成されたチームとする。（日本スポーツマスターズも同様）
ただし、補強等の取り扱いは従来通りで北海道大会（全軟連ではブロック大会に位置付けられている。）に出場したメンバーを変更して本大会（全国大会）に出場することはできない。
- 24 B・Cクラスの全国大会（東日本1・2部、高松1・2部、全日本シニア）は 監督会議及び開会式を実施しない。

この「北海道大会に参加するチームの遵守すべき事項」は、野球競技者必携 2026 及び公認野球規則 2026 のほか、公益財団法人全日本軟式野球連盟並びに一般社団法人北海道軟式野球連盟の特別規程により作成しています。

詳細は競技者必携をミーティング等で伝達共有し、全員が理解するようお願いいたします。

チームは、支部予選から各支部の指導のもと、励行するよう心掛けてください。

<参考>

2026年の改正点です

2026 野球規則改正

<https://jsbb.or.jp/docs/2026OfficialBaseballRulesInJapanRevisions.pdf>



2026 競技者必携改定(訂正版)

<https://jsbb.or.jp/docs/75bc86680162cfaddee72de4e298a4134531c3c2.pdf>

